

# 「授業研究の会」愛知サークル主催 夏の学習会報告

## 教師は「何を」「どう」語るか？

- ◇ 日時 2019年8月24日(土) 午前9時30分～午後4時
- ◇ 場所 名東小学校 特活室(名古屋)
- ◇ 参加 13名

2学期を目前に控えた8月下旬に、2学期よいスタートを切りたいと願っている教師が集まり、「教師の語り」について考えました。今回は、浜松からも4人駆け付け、自ら学ぼうとする会となりました。

### ① 「学級づくりや授業づくりに欠かせない教師の語り」(担当：石井)

自己紹介のときに、各自が「教師の語り」について、自分の問題意識について話すことになっていた。そして、参加者はそれなりに語っているつもりだったが、石井先生に冒頭からダメ出しされた。相手の心に残るように話すには、技術と思いの両方が必要であると。そこから、「教師は『何を』『どう』語るか？」を、丁寧に「分析と総合」することを通して、「学級づくりや授業づくりに欠かせない教師の語り」について提案された。

教師である私たちは、自分の意志・見解・思想・解釈をもち、子どもたちに伝えたいことをただ話すだけではなく感じ取らせる必要がある。そのために、自身を豊かにする努力を惜しまず続けなくてはならないのだと再確認した。

### ② 「授業記録検討」

会員の授業映像と記録、戸田先生の介入授業映像と記録、石井先生の介入授業映像と記録を検討した。戸田先生や石井先生の介入授業映像の記録を起こしたのは大変貴重で、どの言葉を選んでどのように語っているかが分かり、参加者から称賛の声が上がった。

### ③ 模擬授業：総合表現「手ぶくろをかいに」(4場面)

- ・場面の歌・曲9を練習
- ・個々に構成や展開を考えてきたものをもとに、参加者が順に模擬授業を行った。すぐに参加者を児童に見立て、教師の思い通りに動かそうとすることに石井先生の介入が入り、一人一人の音読練習に立ち返った。まずは、語りやセリフの音読をそれぞれの解釈をもとに行うこと、そして構成、演出と。児童に任せる部分と、教師が演出家として出る場面を、模擬授業を通して学ぶことができた。フィナーレの母さんぎつねのセリフの解釈と、雪がふるような群読から曲9へ入っていくあたりは、いつのまにか石井ワールドになっていた。

### <会のまとめ・感想>

会の終わりに、参加者がそれぞれの感想を発表しました。

- ・記録を起こすのは、いいと思った。「語り」を切り口に、根本的に考え直す機会となった。人間性を豊かにしたい。
- ・これからどうしていくかが、課題。
- ・(愛知に来ると)もらえない刺激がある。語りを意識してやりたい。人間性はすぐには高まらないが。
- ・自分の意識をもたせるということ。さっそく、集団演技に生かしたい。
- ・(「手ぶくろをかいに」)は、2学期に実際にやっていくので、いろんな解釈を話しながらやっていきたい。
- ・すごく困った。どうしていいか分からない。自分は流してしまう。自分はだめだったというのが分かった。みんなで考えてやると楽しかった。
- ・とりあえず語りをやったが、やらされ感があった。どうやればいいかを教えてもらえるとよかった。見ていただけだが、自分も参加しているような感じがした。
- ・ちゃんと語らなくてはと思った。「語り」は、奥が深い。自分は分かっているつもりでいることが分かった。
- ・午前ではできなかった「語り」が、午後ではできるようになった。インプットがなければ、語れない。中身を充実する必要がある。